

自然誌 だより

Natural history



三重自然誌の会情報誌 117号

2018年 9月

ダイゼンが見せてくれた砂浜のイモムシ

本年8月24日に雲出川の中州で、ダイゼンが満潮の波打ちぎわから離れ、砂浜を上がっていくのをカメラの視野に入れて観察していました。立ち止まっては近くの砂地や数メートル先を見つめ、急に走りだしては特定の地点に嘴を入れて何かを捕っています。何度目かの時に顔まで砂に潜らせ、嘴で砂の中を探って十数秒後に何かを咥えて頭を上げました。何だろうと考えながら写していると、嘴に咥えられた獲物の形がはっきり見える瞬間があり、甲虫の幼虫（イモムシ）だと判りました（写真1）。ダイゼンがイモムシを捕って食べるのを初めて見て、海水のしぶきがかかる砂浜にも甲虫の幼虫が棲んでいることを知りました。ダイゼンは体長29cmで嘴は短く、地中深くに届かないので、地表近くにいるイモムシをねらっているようです。過去には、オオソリハシシギが同様な行動をしているのも観察しています（写真2）。同種は体長39cmで、長い嘴を砂の中に差し込んで“何か”を採餌していましたが、これもイモムシの可能性あります。こちらのイモムシは深いところに生息していますので、ダイゼンのものとは異なる種の甲虫かもしれません。海浜にはどんな甲虫が生息しているのか？と新しい興味が湧いてきました。



写真1 ダイゼン（左上）、砂に顔を潜らせて採餌（左下）、イモムシを捕まえた（右）（2018.8.24, 松阪市五主町）。写真2 砂に嘴を潜らせて採餌するオオソリハシシギ（2017.10.1, 松阪市五主町）。

（今堀 聖史：津市久居小野辺町1454-30）

ギボシマメガニと高橋敬三

締 次 美 穂

ギボシマメガニ *Pinnixa balanoglossana* Sakai, 1934は、三重県鳥羽市答志島桃取をタイプ産地とする十脚目カクレガニ科マメガニ属の一種で、酒井 恒が記載した大型のマメガニである（図1）。

本種の原記載である Sakai (1934) は、本種の分布を伊勢湾の桃取とし、標本は東京文理科大学（現在の筑波大学）の学友である「Mr. K.Takahashi」の伊勢湾コレクションであると記しているが、採集データの詳細は明らかにしていない。また、タイプ標本の指定もしていない。その後、Sakai (1939) は、検討標本を「Momotori, Ise Bay, 5♂♂, 3♀♀, Mr. Keizo. Takahashi, Aug. 1933.」と表記して採集データを明らかにしたが、タイプ標本については明記されていない。この検討標本の行方については、筆者は突き止めることができなかった。神奈川県立生命の星・地球博物館の酒井コレクションにこの検討標本はなく（佐藤私信）、現存していない可能性もある（駒井私信）。

東京文理科大学は、1930年代に志摩郡（現鳥羽市）答志島の桃取において毎夏臨海実習を実施していた（富田1996）。井上（1938）によると、答志島の臨海実習で得られた動物は、それぞれの分野の専門家に同定依頼を行い報告されている。この専門家の中に酒井 恒と高橋敬三の二人の名前も記されている。「Mr. K. Takahashi」は、この高橋敬三のことである。

高橋（1942）は、第一章の「漁村の夏」で「伊勢湾の入り口にある答志島のこの漁村は、今日もまたすばらしく気持の良い夏の朝をむかへました」とタイプ産地である桃取のことを、卓越した文章で紹介している。さらに、毎年答志島に東京の大学の大勢の学生たちが、先生方に連れられて海岸動物

の勉強に答志島に来ていたこと、宿屋のすぐ前の国民学校の教室が実習室とされていたことなど、詳細に記しており、これらが高橋敬三自身の体験によるものだということが分かる。このようなことから、高橋敬三の本種標本は、東京文理科大学の1933年の臨海実習において採集されたものであると思われる。なお、高橋敬三氏は、多毛類分類の研究者として活躍し、東京家政科大学の教授、学長を経て理事長を務められた。

文末であるが、ギボシマメガニの標本についての情報を寄せてくださった神奈川県立生命の星・地球博物館の佐藤武宏専門学芸員と千葉県立中央博物館の駒井智幸主任上席研究員にお礼申し上げる。



図1 鳥羽市浦村産ギボシマメガニ（写真上；雄，甲幅12mm/写真下；雌，甲幅13.9mm）

引用文献

- 井上 巖. 1938. 答志島及び其の附近の沿岸動物群の観察. 博物学雑誌36 (64).
Sakai, T. 1934. Species of the genus *Pinnixa* (Pinnotherid crab) found in the Far East. *Science Reports of the Tokyo Bunrika Daigaku*, (B), 2 (29), 37-43, 3figs.
Sakai, T. 1939. Studies on the Crabs of Japan. IV. Brachygnatha, Brachyryncha. 365-741, pls. 42-111. Yokendo, Tokyo.
高橋敬三. 1942. 海岸の動物研究. 研究社, 東京, 236p.
富田靖男. 1994. 答志島の海洋生物. in 三重県編, 三重県史別編自然, p34.

（しめつぐ みほ：津市河芸町上野560-14）

アカギツネの生息

上 田 利 彦

我が家は雲出川支流長野川の右岸河岸段丘の上に広がった畑地に立地しています。以前は茶畑が中心でしたが、現在はビニルハウスや太陽光発電に変わりつつあるものの、まだ自然豊かな畑地の一角です。これまでも、時折夕刻に車のヘッドライトの先に一瞬、目を光らせながら獣が横切り、そのふさふさした尾の形状はまぎれもなくキツネで、その生息を確認していました。また、父親が子供の頃は河岸段丘の上にキツネの巣穴があり、夕方、畑作業の帰り道に、顔を出しているのを時折見かけたとも聞かされていました。

今年2月28日午後4時過ぎのこと、帰宅すると隣地の畑にたたずむキツネを見かけました。車を止めると一瞬逃げる態勢に入りながらも、ふと立ち止まりこちらを窺っています(写真1)。さらに、3月31日午後7時ごろ、愛犬がいつも以上にけたたましく吠え続けることから、その先を懐中電灯で照らしたところ、30mほど先の土置き場で小さく光る二つの目を確認しました。犬を連れ近づいても伏せた状態で逃げようとはしません。子猫かなと思いクズの蔓を踏みつけながら近づくと、目の前のくぼ地にきょとんと6つの目を光らせて3頭の子狐がいました(写真2)。足元を見ると迷路のように獣道があり、その先には直径30cm足らずの巣穴があちこちに空いていました(写真3)。河岸段丘からやってくると思いこんでいましたが、実は我が家からほど近い耕作放棄地で繁殖していたのです。

さて、3頭の子ギツネたちは、巣穴を数度にわたって観察されたことで警戒したのか、巣を離れてしまいました。しかし、毎晩我が家の周辺を動き回るらしく、愛犬は絶えず吠えまくっています。飼い犬が繋がれていることをよく知っていて、悠々と目の前を横切っていくのですから困ったものです。最近、鶏小屋も狙っているようで、先日は小屋の下に穴を掘っていました。鶏を盗られては困りますが、これも里山暮らしでの野生動物との共生と思えば楽しいものです。

(うえだ としひこ：津市久居一色町176-1)



写真1 夕方姿を見せた親ギツネ (2018.2.28)



写真2 巣穴付近で遊ぶ仔ギツネ (2018.3.31)



写真3 巣穴のある築山 いくつも出入り口がある

熊野灘沿岸海跡湖の水質

清水善吉

三重県南部の熊野灘沿岸には海跡湖が点在しています。海跡湖とは、かつて入り江であったところが海と切り離され、内陸に封じ込められてできた池沼で、県内ではハマナツメやツクシナルコなどの希少植物が周辺に生育することが知られています。また海跡湖は、全国的にみると埋め立てられ消滅してしまったところも多く、熊野灘沿岸のように多数の海跡湖が自然状態で残っているのはまれです。地形的にも重要であり、希少植物も多く生育することから、尾鷲市の須賀利大池は国の天然記念物に指定されています。

このように自然史的に重要な場所であることから、当会では過去に何度か観察・調査を実施しており、その際に水を採取し、簡易な水質検査を行ってきました。昨今、須賀利大池などでみられるハマナツメの生育不良は水質悪化も一因とされていますので、過去の水質と比較することは保全対策上有効と思われます。そこで、同池も含む6海跡湖の水質検査の結果を報告しておきます。

水質検査を行った海跡湖は以下のとおりです。



図1 調査した海跡湖の位置図（国土地理院地図使用）。

- 1 須賀利大池：尾鷲市須賀利町（写真1）
- 2 須賀利小池：尾鷲市須賀利町（同2）
- 3 妙神池：紀北町三浦_鈴島（同3・4）
- 5 諏訪池：紀北町長島（同5）
- 6 芦浜池：大紀町錦（同6）
- 7 塩竈池：南伊勢町道行竈（同7）

分析に用いた水は、調査終了時に海岸漂着物の2Lペットボトルを拾い、池の水で洗ってから採水しました。採集した水は、車に着くまでの30分～2時間はそのままの状態運び、到着後はクーラーボックスに入れ、帰宅後は冷蔵庫に保管しました。測定・分析項目は、水素イオン濃度(pH)、化学的酸素要求

量(COD)、生物化学的酸素要求量(BOD)、全窒素(T-N)、全リン(T-P)、塩化物イオン(Cl⁻)の6項目です。なお、分析は三重県環境保全事業団で行いましたが、その際にさまざまな便宜を図っていただきましたことに感謝いたします。

分析結果は表1に示しました。

分析結果について、詳細な考察をする知識は私にはありませんが、汚れ・富栄養化の目安であるCOD、T-N、T-Pの値をみると断トツきれいなのは塩竈池で、逆に須賀利大池はかなり汚れていることがわかります。また、不思議なのは妙神池のCl⁻値の高さで、1989年は1200mg/L、2年後には汽水レベルの2300mg/Lにまで上昇しています。この池は小高い位置にあり、50mほどの幅の礫浜に隔てられているため海水の流入はまったくありません。この池では、昭和20～25年にかけてボラの養殖やイグサの栽培のために人が居住していたようですので(写真4)、その時の生活排水の影響やカモ類の生息が関係しているのかもしれませんが、私の記憶では、芦浜池の水は泳ぎたくなくなるほどきれいでしたが(実際に何人か泳ぎました)、妙神池の水は薄茶色でやや腐敗臭もしていました。

採水した時期もまちまちで、また、規定に沿った採水・保管をしたわけではありませんので、正確

表1 熊野灘海跡湖の水質

No.	池 名	採水日	結 果						備 考
			Cl ⁻ (mg/L)	Ph/°C	T-N (mg/L)	T-P (mg/L)	COD (mg/L)	BOD (mg/L)	
1	須賀利大池	2001/8/2	22	7.1/22	3.1	0.21	16.0	5.1	清水1989
	須賀利大池	2007/3/10	34	9.8/14	1.2	0.23	23.0	5.7	
2	須賀利小池	2001/8/2	4.3	8.6/21	0.58	0.071	9.0	3.9	
3	妙 神 池	1989/4/22	1200	7.0/—	2.0	0.58	22.0	5.8	
	妙 神 池	2001/3/20	2300	7.1/20	0.93	0.047	10.0	6.3	
5	諏 訪 池	2005/5/31	110	9.8/23	0.48	1.1	6.8	3.0	
	諏 訪 池	2011/11/20	150	6.4/18	2.1	0.3	7.0	—	
6	芦 浜 池	2001/7/14	96	7.1/21	2.5	0.43	4.1	1.4	
7	塩 竈 池	2005/6/4	36	7.4/23	0.31	0.026	3.8	1.3	



写真1 須賀利大池（2001年8月3日），2 須賀利小池（2001年8月2日），3・4 妙神池と井戸跡（2001年3月20日），5 諏訪池（2005年5月30日），6 芦浜池（2001年7月14日），7 塩竈池（2005年6月4日），8 座佐池（2000年10月19日），9 薄月池（2000年10月19日）。

な分析結果とは言いがたいかもしれませんが、海跡湖の環境変遷を知る手がかりとして活用していただければ幸いです。また、水質の検査は実施していませんが、座佐池（南伊勢町新桑竈）と薄月池（同栃木竈）の写真も参考までに掲載しておきます（写真8・9）。

文献：清水善吉．1989．鈴島紀行．ハマナツメ通信，（10），1-5．

尾鷲市教育委員会生涯学習課．2016．海跡湖 須賀利大池・小池．尾鷲市教育委員会，15 p．

（しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17）

晩夏 熊野路 滝巡り ルーミスシジミ採集記一

河 本 実



写真1 ルーミスシジミ(2005年8月27日、和歌山県古座川町)



写真2 布引の滝



写真3 大滝



写真4 落打の滝

ルーミスシジミ *Panchala ganesa* は、日本では房総半島以南の深い照葉樹林帯に局地的に分布する小さなシジミチョウである(写真1)。県内では、伊勢の神宮林が多産地として良く知られていたが、紀和町(山本1988; ひらくら, 444)でも生息が確認され、現在は尾鷲市から紀宝町にかけて幾つかの産地が見つかっている。このチョウを訪ねて、県南部の滝巡りを行ったので報告する。

布引の滝(熊野市紀和町小栗須, 写真2)

2018年8月26日、近年記録が集中している熊野川支流楊枝川の枝谷にある布引の滝に向かった。布引の滝は、花崗岩の岩盤に1枚の白い布を垂らしたかのような落差53mの優美な滝で、「日本の滝100選」にも選ばれ、市の観光案内マップなどに紹介されている有名スポットである。ルーミスシジミは滝周辺の谷に広く生息しているようで、この日も滝上流の堰堤近くの道路沿いで見ることができた。撮影も試みたが、なにしろ俊敏でシャッターを押す前に逃げられてしまい、さらに、何頭も絶好の採集チャンスを逃してしまった。悔しい。

大滝(熊野市紀和町小栗須, 写真3)

大滝は楊枝川本流に沿った林道を徒歩10分ほどのところにある。布引の滝の女性的なたたずまいに比べてこちらは武骨で荒々しい男性的な滝である。ルーミスシジミは八丁出合橋から大滝までの道路沿いの崖でちらほら見ることができた。ここでも懲りずに1回撮影を試みたが、またしても失敗。めげる。

落打の滝(紀宝町大里, 写真4)

ルーミスシジミは昼なお暗いV字谷の深山幽谷が生息地で、新しい生息地を探す際には滝が重要なキーとなる。国土地理院の2万5千分の1地形図をみると紀宝町に三つの滝が載っており、そのうち落打の滝がいかにもよさそうである。桐原の集落に設置された「桐原自然散策コース」の案内板には落打の滝を始め八つの滝が紹介されている。荒れた林道を10分ほど走ると「落打の滝徒歩15分」の案内板があった。近くの崖の木々をネットで叩きながら歩くとすぐに1頭飛び出しネットイン。あらま、なんとあつけないことよ。ともあれ、地図で目星をつけて現地に赴き、自分の推理通り棲息を確認するのはとても楽しい。これで今日の目的は達成したわけだから他のポイントを探してもいいのだが、せっくなので滝まで行ってみることにした。

案内板の先に道はなく、ゴロゴロ転がる巨岩を飛び移ったり冷たい急流を横切りながら沢を遡り、

覆いかぶさるような岩の壁を抜けると突然目の前に大瀑布が現れた。そのあまりに劇的な登場に思わず「おお！」と声が出た。台風の後だからか水量が豊富でなかなかの迫力である。滝壺の脇で剃髪瘦身の男が静かに座禅を組んでいる。どこかのお寺の僧だろうか？ 修行の邪魔をするといけないうで滝壺から離れた木陰に座ってここまでの難行（ちょっと大袈裟）の疲れを癒す。目の前の滝の爆音と周囲の木々から聞こえる蝉の声のみがあたりを包み、静かな心で帰路につく。

林道に戻ると先程と同じ場所に1頭現れた。今度は撮影してから採ろうとカメラを向けた途端、高所に飛び去ってしまった。ああもったいない！ 煩惱がまたまた頭をもたげる。まだ修行が足りないようだ。

飛雪の滝（紀宝町浅里，写真5）

飛雪の滝には中西（2015；ひらくら，292）の記録がある。林道をこのまま先に行けば浅里側にもいいポイントがありそうであったが、少し行くと倒木が道路を塞いでいたので桐原方面に引き返す。すると先程の高僧？ が林道を歩いているのに出くわした。余計なお世話かなとは思ったが「乗りますか？」と声を掛けたらあっさり乗り込んできた。お話を聞くと仏門とは関係がなく、対岸の新宮からやって来た滝好きのただのオジサンであった。



写真5 飛雪の滝

飛雪の滝は熊野川沿いの道路に面した落差30m幅10mのけっこう立派な滝で、キャンプ場が整備されている。林道をしばらく進むとしだいに谷が深くなりルーミス好みの環境になってきたと思った矢先、やや小さく白っぽいものが目に飛び込み近くに止まった。見るとまぎれもなくルーミス！ また逃げられてはかなわないので写真を撮ることはあきらめ、慎重にネットを振った（結局この日は生態写真を撮影することができず、掲載の写真は以前に他所で撮影したものです）。

この日は四つの滝すべてでルーミスシジミを確認することができたわけだが、インターネットで検索すると、この地域には他にもたくさんの滝情報が出てくる。今日巡った滝もそれぞれ違った表情があり、アプローチも面白く、虫捕りを横においても今度は滝巡りをメインで来ようか、と思いながら帰宅の途についた。

ルーミスシジミの採集データ

日付はすべて2018年8月26日 採集者は筆者

2exs. 熊野市紀和町小栗須布引の滝上流部，3exs. 熊野市紀和町小栗須大滝付近，1ex. 紀宝町大里林道桐原浅里線落打の滝付近，1ex. 紀宝町浅里林道桐原浅里線飛雪の滝上流部

（かわもと みのも：四日市市西阿倉川950-2）

既報のヒメイトトンボの誤同定に伴う種名訂正について

筆者は、「三重自然誌」第15号（2017年）において、「三重県産トンボ目昆虫の記録（未発表資料の整理）」を報告しました。そのなかでヒメイトトンボ（*Agriocnemis pygmaea*）♂3頭（17-VIII. 2002，伊賀市比土馬場池）を記録しましたが、本会の山口和洋氏より分布上疑問があるとのこと指摘をいただきました。筆者の標本は三重県総合博物館に大部分を寄贈しているので、本種についても同館の大島康宏氏のご協力をえて資料の再調査を行いました。その結果、アジアイトトンボ（*Ichnura asiatica*）の小型個体（体長22mm程度）の誤同定であったことが判明しましたので、ここに訂正いたします。貴重なご指摘をいただいた山口和洋氏ならびに再同定でお世話になりました大島康宏氏に厚く感謝の意を表する次第です。

（富田 靖男：松阪市川井町822）

近所のため池で巨大なドブガイが生息！

上 田 利 彦

本年2月28日、散歩中に道端のため池の水が抜かれていることに気付きました。通称ひょうたん池という小さなため池は、30年程前はカイツブリが生息し、その繁殖行動を道路上から観察できるほど静かできれいなため池でしたが、時がたち上流に住宅が建ち並び、生活雑排水が入り込んだせいか水は淀んでおり、見た目にも綺麗とは言えない状態になっていました。案の定、水が抜かれてあらわになった池底はヘドロがたまり、その中に泳いでいる50cmほどの鯉の姿が見えないほどでした。その日はすでに日没時でもあり、今はやりのかいぼり（この辺りでは「どろこね」）でもするのかな？であれば、数日は水を落としたままにするだろうと思いそのまま帰路につきました。

さて、数日後、再び立ち寄ってみると、どろこねではなかったらしくすでに水位が戻り始めていました。連れていた犬に引かれるまま下流側の堤防上を歩いていくと、ポンプ場辺りに大きなドブガイの殻が転がっていました。古いものではなかったもので、もしや？と辺りを見回すと、生きた貝もひとつ。また、水際でも数個の殻が転がっている中に生体を見つけることもできました（写真1）。

子供のころ（40数年前）、この池の水掛かりの田んぼの水路では、シラハエやカワムツなど流線形をした魚が中心で、ときおり体高のある魚を捕ることができました。ヒゲがあったことも覚えており、それがタナゴであったことは間違いのないと思います。残念ながら、明確な婚姻色の記憶はなく、今となってはそれが何タナゴだったのかは判断のしようがありません。

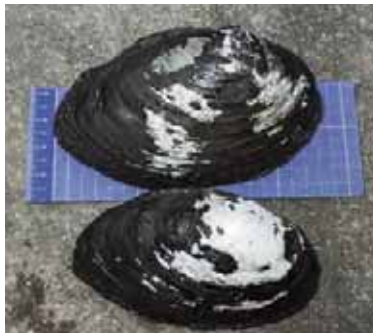


写真1 採集したドブガイ

10年ほど前からこの池の水系を幾度か見て歩きましたが、二枚貝やタナゴの生息は確認できませんでした。今回このため池にドブガイが生息していると分かったことは、自分の記憶と合わせてこの地域にタナゴが生息していたことを裏付けるもので、今もこの水系のどこかでひっそりと生息しているのではと思っています。

後日、水抜き作業をした方と話をすることがあり、ドブガイはたくさんいたので、子供たちに見せるために近くの保育園に持ち込んだとのこと。子供たちの反応はどうだったかは聞いていませんが、深く興味を持った子がいることに期待したいと思います。

（う え だ と し ひ こ 津市久居一色町176-1）

事務局から

○「みえ生物誌」の注文をお忘れなく

本誌前号にも同封しましたようにみえ生物誌シリーズを秋以降に順次刊行していきます。三重県の生物多様性を網羅した資料集ですので、野生生物や環境問題に関心のある方にはぜひお手元においていただきたいと思います。なお、会員配布はありませんので、入手ご希望のかたは同封の注文書でお申し込み下さい（有償）。

編集後記

縮次美穂さんの報文中にある「5♀♀, 3♀♀」の表記に気づかれましたでしょうか？♀♀記号のダブルは複数形を表すそうで、かつては一般的だったそうです。次号は12月発行予定ですのでふっでご投稿ください（善）。

自然誌だより117号

発行日 2018年9月26日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp